

一原有徳・多面体
地球の部品掌の中にあり

一原有徳(1910年生)は小樽在住の版画家です。徳島に生まれ、幼い頃に一家で北海道に移住しました。美術家としては遅く出発しましたが、常識にとらわれない、しなやかなものの見方やアイデアによって、新鮮なおどろきをもたらす表現を生み出してきました。本展は、俳人、あるいは岳人として、一原がしるしてきたユニークな足跡にも注目し、「多面体」という言葉をキーワードに、芸術家・一原有徳の魅力をご覧ください。



〈SON1001 ZON1001〉1980(昭和55)年

俳人・一原有徳

一原は、商科学校(夜間)在学中、書道教師の句会に参加し、俳句を始めました。戦前から結社に所属し句集も出しましたが、美術界にデビューした1960(昭和35)年から15年ほど中断、1974年から再び取り組みました。

尿はじく九億トンの安山岩

生きるは蝸牛のみ煮えたぎる海と陸

身近で小さなモチーフを、宇宙的／惑星的時空間へと一気に展開させるダイナミズムは、微小なイメージを集積して巨大空間を構築する、一原の版画世界にも通じるかのようです。

岳人・一原有徳

一原は、1931(昭和6)年から、「地図上の未知に興味を持って」、道内の登山を始めました。後年、版画制作について、「一番興味があるのは、いろいろなものを見つけ出すこと」と語っていますが、未知なるものを求める精神は、まず登山というかたちであらわれていたといえます。山をめぐる俳句には、その一端がうかがえます。

バミリオン、レモンイエローの底のブラック温泉に(雷電旭温泉 1939年)

脳天に雲裂け氷のシャンデリヤ(天塩岳 1939年)

巨大なパイプ地上に腹を出して秋(樽前山 1958年)



〈SIO〉1992(平成4)年



〈SIO12〉1993(平成5)年 ※表紙作品

版画家・一原有徳

一原が勤務する通信省小樽貯金支局(のち郵政省小樽地方貯金局)には、画家・須田三代治がいました。1951(昭和26)年、須田から油絵具一式を贈られ、一原は油彩に取り組み始めます。ある日、パレット代わりにしていた石版石の上に残ったペインティング・ナイフの痕跡を紙にすり取ると、思いもよらない画像があらわれました。以後、一原は一枚しかすりとれない版画(モノタイプ)に取り組みます。モノタイプ以外にも、金属凹版や、熱版、オブジェなど、若々しい実験精神にもとづく、みずみずしい表現が生み出されています。